議　事　録

会議名	**令和６年度　第１回三鷹市認知症地域支援ネットワーク会議議事録**
日　時	令和６年４月 23 日（火）　午後６時 30 分～午後８時
会　場	三鷹市教育センター　大研修室
出席委員	【委員】　神﨑恒一、菊池健、木之下徹、望月諭、名古屋恵美子、望月謙治、齋藤貴彦、上遠野範子、服部将志、道三啓吾、谷川由香 ＜定員数 11 人中 11 人出席：有効＞
事務局	高齢者支援課長、他事務局３人
会議の公開・非公開	公開
傍聴人数	0 人

開会

【三鷹市高齢者支援課長より挨拶】

昨年６月に制定された認知症基本法が１月１日付で施行となった。共生社会の実現に向けて、これから国や自治体で法律を踏まえた様々な取組が本格的に行われていくだろう。三鷹市でも、法律に基づいた計画の策定や、市独自の条例の制定を目標とするなど、新しい取組も予定している。皆様の御協力をいただきながら、しっかりと進めてまいりたい。

【事務局からのお知らせ】

・異動に伴う新人職員の挨拶
・会議の傍聴について
・議事録の作成と公開について
・本日の配付資料の確認

２　議題

(1)　三鷹市における認知症施策の検討

ア　三鷹市高齢者計画・第九期介護保険事業計画について

本計画について、令和６年３月に策定が完了した。

イ　令和５年度事業実績報告

ウ　令和６年度事業実施予定

①認知症初期集中支援事業

杏林大学病院認知症疾患医療センターでアウトリーチ事業を実施。令和５年度の実績は０件。

②認知症初期集中支援推進事業

対象者が２人おり、会議・訪問・面談等で３回実施した。

③若年性認知症患者への支援と相談体制の充実

「スリーホークス」（記憶のしづらさがある方の会）を 12 月と２月に実施し、参加者 17 人。令和６年度も継続して４月より隔月実施する。

また、若年性認知症をテーマに地域支援連絡会を実施した。

④認知症への理解を深める取組の推進

11 月に「認知症にやさしいまち三鷹」のイベントを実施し、133 人が参加。

図書館及び市民ホールの企画展示をそれぞれ実施。

「けんこうみんなのマルシェ」へブース出店。

三鷹まちゼミへ参加し、認知症サポーター養成講座を実施。（受講者 11 名）

令和６年度の実施予定について、イベント、企画展示は継続。９月 21 日「認知症の日」にイベントをさんさん館にて実施。企画展示は９月、12 月の予定。

⑤認知症サポーターの養成とチームオレンジの構築

令和５年度実績

認知症サポーター養成講座　25 回開催　受講者 385 人

キッズサポーター養成講座　11 回開催　受講者 539 人

認知症サポーターフォローアップ講座　１回開催

講座のテキストが昨年 10 月に改定となり、内容やレイアウトが変更。移行期間を設けたのち、今年の２月以降は新版テキストで講座を実施した。

チームオレンジについて、有料老人ホーム１箇所のテラスでガーデニングを実施。

令和６年度は、地域で活躍したい方とニーズのある地域活動のマッチング方法について模索する。また、例年の課題としてチームオレンジの構築について引き続き検討する。

⑥認知症ガイドブックについて

令和５年度は 6,000 部を発行。内容の不足や更新すべき箇所があるため、令和６年度の作成にあたり、サロン等の地域活動に出向いたり、委員の皆様からご意見をいただきたいと考えている。

委員	スリーホークスで行っている診断後の支援は、若年性認知症の診断の有無に関わらず活躍できる場所を生み出すための取組である。また、認知症についての周知を行うイベント「RUN 伴」は、全国で展開しているが、それを三鷹でも実施することとなった。 認知症初期集中支援やアウトリーチ事業の件数が伸びない背景を探り、当事者に医療や介護サービスが届く体制に再構築していくための意見交換の場を作り、現場で起きていることが地域支援ネットワークの中で共有されていくことが望ましい。

（２）その他

委員	認知症基本法が制定されたものの、具体的な政策を国が示しておらず、多くの自治体は何をすべきかわからない状態にある。現在、認知症施策推進関係者会議において議論が進行中であり、基本計画が早くても秋に公表される予定である。このため、具体的な方向性を示すのが難しく、現状では積極的に取り組むべきことが見えにくい。 おそらく参考となるのは認知症施策推進大綱であり、インターネットで閲覧可能である。大綱にはいくつかの柱があり、それぞれに KPI（主要業績評価指標）が設けられている。具体例としては以下の内容が含まれる。 1. 普及啓発・本人発信支援 2. 予防

	3. 医療・ケア・介護サービス・介護者への支援 4. 認知症バリアフリーの推進・若年性認知症の人への支援・社会参加支援 5. 研究開発・産業促進・国際展開 例えば、普及啓発に関しては認知症に関する理解促進や認知症サポーターの養成が目標として掲げられている。予防では介護予防に資する通いの場への参加率やスポーツ実施率の向上を目指している。医療・ケア・介護サービスの分野では、初期集中支援チームの訪問実人数や認知症疾患医療センターの設置数が具体的な数値として示されている。認知症バリアフリーや若年性認知症の支援に関しても具体的な取組が記載されている。 これらの KPI を基にして、次の基本法にも似たような指標が設定されると予想されるため、現段階で把握しておくべきである。ただし、前述の KPI に関する目標数値の具体的な達成方法や評価方法に関しては、詳細な確認が必要である。そのため、今後の計画が発表されるまでの間、これらの KPI を意識しながら準備を進めていくことが重要である。最後に、ここに挙げた内容に関して意見がある方は発言を求めたい。
委員	本日の委員は現場を抱えている方が多いと思うが、もう少し現場の状況を共有できる時間が欲しい。三鷹に何が必要か、という議論ができれば、この会議のみならず認知症にやさしいまち三鷹推進会議においても話題にできる。
委員	自分は２年ほど前に GPS を用いた捜索を提言したことがあり、結果に繋がった。認知症の方の手がかりとしてあんしんキーホルダーがあるが、ケアマネジャー等でもキーホルダーの存在を知らないので、引き続き発信していきたい。専門職は市で作ったものを市民に活用してもらえるよう意識を持つべきだ。
委員	認知症の方は全てを忘れているわけではなく、ヒントがあれば思い出すことがある。ロボットなどの仕掛けやヒントを提供することで、自信喪失や生きづらさを軽減できるのではないか。認知症の方の生活に希望を与えたい。
委員	訪問診療では、中等度・重度の認知症患者が多い。患者が独居の場合、身の回りのことができなくなると施設入所を勧める状況が発生するが、本当に良い判断なのかはわからない。本人が在宅を希望する場合もあるので、今後、中等度や重度に相当する人が増加する見込みの中で、どのように支援していくのかが課題だ。
委員	この会議について、改めて強い意味付けを持たせたい。目的を明確にし、問題提起だけでなく具体的なテーマと行動方針を定めるべきだ。認知症にはさまざまな症状があり、診断後サービスを受けるまでの「空白期間」が存在する。調査によれば認知症患者の 7 割が未受診であり、現在認知症や MCI の数が 1,000 万人を超えている。この会議では未受診の 7 割の人々に焦点を当てるか、それとも地域の問題となっている認知症患者に焦点を当てるかで前提が変わ

	るのではないか。
会長	アプローチ方法の検討が必要だが、範囲が広すぎてどのように取り組めば良いか不明確である。自分が診療する大半は MCI 患者であり、診断後の支援に限界を感じている。医療の時間が限られている中で有用な診療が困難な現実がある。のぞみメモリークリニックやスリーホークスのような救われる場所を患者にもっと知ってもらいたい。診断後の支援が不足していることをネットワーク会議のテーマにしてほしい。診断自体が患者に精神的負担を与えてしまうこと（スピリチュアルペイン）に対して医師は苦悩を抱えている、ということを強調したい。
委員	この会議の方向性について意見交換するのは重要であり、毎回の議事に加えるべきだ。認知症にやさしいまち三鷹推進会議でも話題にしたい。相談の現場からは、未受診の認知症患者が多く、家族へのケア理解や医療の啓発が必要だと感じる。三鷹では訪問診療の医師が充実しており、ケアマネジャーや包括職員と現場状況を共有することが大事。小規模多機能型介護施設は随時型訪問で独居の方を支援しており、施設入所しなくとも生活可能な状況をサポートしている。
委員	認知症は老化の一部だが、医学は平均寿命を延ばすために進歩しており、死ぬことが大変な時代になったと感じる。必ずいつかは最期を迎えるが、認知症であっても年齢は関係なく、死に方は様々。その人らしく最期を迎えられればよい。本人への問いかけは大事だが、「こうしてあげなければいけない」と思い過ぎないほうが良い。
委員	認知症の方の ACP について、自分の所属しているＡＣＰ推進チームでも取り上げたい。病院のみならず地域も含めてどのようにその人を理解していけるかを検討していきたい。この会議でもそのような切り口で何かできれば良い。
委員	先ほどスピリチュアルペインの話が出たが、診断したからこそ有用な情報を提供することができると考える。三鷹市の認知症ガイドブックは非常に役立つが、自立支援医療、精神障害者保健福祉手帳、障害年金の説明がない点が課題である。診断によるスピリチュアルペインのジレンマはあるが、情報提供は可能。一般的な情報と三鷹市独自の情報を区分する等掲載方法を工夫できれば良い。
委員	私は地域でお元気な方の自主グループ立上げや活動参加を支援している。その中には認知症の方も含まれており、グループ内で助け合いながら参加している。認知症の方が日時を忘れたり、会場に一人で行けなかったりすることもあるが、順番に自宅まで送迎するなどの助け合いが行われている。しかし、役割分担が難しいグループも存在する。チームオレンジのメンバーを活用して少しの声かけや同行をしてもらうことで、認知症の方も活動に参加できるようになることを期待している。

会長	また、社協では介護者の支援として、定期的に介護者が集まって情報交換する機会を設けている。参加者の中には認知症の方を介護している人が多く、苦労しながら介護を続けている。介護保険のサービスだけではカバーできない例が多いので、地域でサポートできる仕組みが必要だと感じている。近年、「ビジネスケアラー」と呼ばれる働きながら介護をしている 30 代、40 代の参加者も増えており、若い介護者への支援も必要である。 現場の苦しみについての話が中心になってしまったが、そこから何かが見つかれば良いと感じる。認知症ガイドブックは非常に役立っており、現場での説明が容易になった。普遍的な情報を別建てにする意見もあるが、全て一緒に進めるのは難しいため、できるところから取り組むべきだ。今日の意見を参考にして、行政は長期的な課題として検討する事項を区別してまとめてほしい。

３　閉会

今年度の第２回のネットワーク会議から新規の改選後の委員となる。予定では令和６年 10 月頃の予定である。今期における２年間の任期が、４月 30 日をもって終了する。５月以降には３期の新委員の推薦依頼を予定しており、その準備を進める。退任する委員より挨拶をいただく。

委員	認知症の症状は個人差が大きく、取組が難しいと感じている。だが、「認知症にやさしいまち三鷹」の取組を通じ、人にやさしい気持ちになることの重要性を再認識した。病気になったり年を取ったりすると落ち込むこともあるが、人の優しさにより温もりを感じることもある。そういった「人にやさしい」政策を作ることが重要であると思う。私自身はケアマネジャーとして、認知症でも障がいを持っていても自分らしく生きることを支えていきたいと考えている。今後、専門職の方々との関わりを持ち、指導や相談を求めていこうと思っている。

―― 了 ――

議事録署名委員

令和６年 10 月 23 日　　神崎 恒一

令和６年 10 月 23 日　三鷹市西部地域包括支援センター服部将志